

## 私學のダイヤモンド たりし金井彦三郎氏

私學の權威たりし金井彦三郎氏は昭和七年一月七日突然に心臓痙攣を起して逝去された。

○  
明治初年以來、大小無數の土木建築に關する工事の實際に當つた技術家の殆んど總ては實に私學出のエンジニアであつた。私學出と官學出と程度こそ異つたが、實際の工事に關して技術の爲に努力した効果と言ふものは、官學と私學とに何等の變りも無つた。此等多數の私學出の俊才の中に於て、我が金井彦三郎氏の如きは最も輝かしい努力を捧げた一人であつた。あれだけの學識と努力とを有し乍らも遂に博士號すら得られなかつた事は、私學出身者幾萬人の爲に惜しい事であつた。獨力で植物學を専攻した牧野富太郎氏も、帝大教室に居たが爲に學位を得たのかも知れない、我が金井氏の如きは官學に關係しなかつただけの理由で學位を得られなかつた様なものである。

○  
金井氏は岐阜縣の人で、明治十七年頃衛生局の筆記生となり、日給金貳十五錢を得つつ傍ら攻玉社に學び、工學の素養を修めた、後に東京市役所、東京府、鐵道省、江戸川水道、其他に關係して何れも氏の工學的實力を充分に發揮する事が出来た。

大震災前の東京市の橋梁は金井氏の施工になつたものが甚だ多かつた。特に京橋、お茶水橋、新橋、吾妻橋、其他に金井氏の名は原龍太博士の名と共に廣く市民にまで知られてゐた。

○  
鐵道方面では東京驛と共に烏森から神田までの日本最初の火建築と高架線工事の主任技師として堅實なる施工振りを發揮した。教育上の功勞は又金井氏の偉大なる一面である。攻玉社工學校を初め、同高等工學校、昭和鐵道學校、武藏高等工學校、關西鐵道學校、鐵道省の教習所等に教鞭を執つた。特に攻玉社工學校教授としては數十年間一日の如く盡力された。攻玉社も氏の學徳と功勞に酬ゆる爲に名譽校長の稱を贈つたとの事である。

○  
金井氏の工學に關する著述は實に多數であつた。測量書あり、橋梁書あり、材料書あり、力學書あり、



金井彦三郎氏

數學書等其他多數に及んでゐた。晩年には土木人名誌の編纂に着手してゐた。此の原稿は死の最後まで筆を執つてゐた様である。

○  
一口に言へば金井氏は非常に頭の緻密な努力家であつた。此點は技術家として最も適した性格の一つであつた。學生の指導は又實に親切丁寧であつたから師弟の關係が實に人情美に富んだものであつた。趣味としては讀書研究の以外には何物も無つたらしい晩年は古書や廣文庫を藏し之を一頁宛綿密に漁つた

○  
金井氏は土木英文時代の各種工事に關係しながら決して名利を求めなかつたが、然し氏の誠意ある努力に對しては何れも物質的にも精神的にも優待をされてゐる。之は元より當然の事であるが、又氏は身を持つ事實に嚴正であつたから、常に讀書し常に研究しつゝ、然も多くの學校に關係し、各團體に關係して六十六歳に至るまで能く其職責を果す事が出来たのであらう。氏は餘りに勤勉家であつた、而して責任感の強い人であつたから、晩年胃腸を害してから決して讀書研究を怠らなかつた。

○  
金井氏の學識と經驗とは實に當代の大家として推賞するに充分なるものがあつた。金井氏が設計し施工した無數の各種工事は、今日尙ほ帝都の中央に文化の輝しい榮光を放つてゐる。私學の學風は今日次第に荒怠に瀕しつゝある際に、金井氏の如きを亡ぶは國家の爲に實に惜むべき事である。(一記者)